



佐々木佐五平像（左）と明治時代のはやし屋台（右）



昭和28年、大町を通過する横町組のはやし屋台



昭和29年、大町を通過する川口町組の町印と打ちばやし



現在の町印（左・立町組）と打ちばやし（右・袋町組）

明治より戦前のはやし屋台は担ぎ屋台で、大きなものでは100人を超える担ぎ手が必要だった。しかし、戦後は人手不足から台車式の押し屋台に変更され、昭和47年には全ての屋台が押し屋台となった。祭りや屋台の形態が変化する一方で、脈々と継承されてきた打ちばやしとはやし屋台の音曲は、昭和38年に「火防祭の屋台囃子」として県無形民俗文化財に指定された。

4月29日、水沢区の市街地が一年を通して一番の人出でにぎわう。300有余年の歴史を持ち、祭りの音曲が県無形民俗文化財にも指定されている「日高火防祭」の本祭当日だ。

豪華絢爛なはやし屋台と古趣豊かな音曲が観客を魅了するこの祭り——ここにも、少子高齢化の波が押し寄せている。伝統の祭りの現状と、祭りに携わる人たちの思いに迫った。

【写真】遙拝式…出発前のはやし屋台が大手通りに並び、参道入り口から日高神社を遙拝、揃い打ちを行う



【特集】伝えゆくひぶせの心

——日高火防祭・300有余年の歴史絵巻

祭りの変遷

もともと祭りで運行されていたのは、6町組の「町印」と「打ちばやし」だった。奏でる音曲から「トットコメエ」と呼ばれる打ちばやしは、はやし屋台に比べ大きさも登場者の数も半分以上で、装飾もごく素朴なものだった。

「はやし屋台」が祭りの主役になったのは明治以降のこと。明治9年の天皇の水沢行幸で街路整備が行われ、道幅が広がったことが屋台の大型化を後押しした。町組は屋台の豪華さを競い合い、屋台に登場する「お人形さん」が祭りの花形になっていた。

旧藩時代、後に水沢城主となる伊達宗景は、仙台伊達家の命を受けて江戸に滞在していた明暦3（1657）年に死者10万人といわれる大火災に遭遇。火災の恐ろしさを肝に銘じた宗景は、水沢で城下の火防対策に万全を期した。その際、人智の不測不慮の災害を神仏の加護によって未然に防止しようと、日高妙見社の「日」は「火」に、同神社境内にある祖霊社・瑞山神社の「瑞」は「水」に通じるとして、両社に火防を祈願し始めたのがこの祭りの発祥といわれている。

日高火防祭の由来

また、享保20（1735）年、水沢城下で168戸を焼失する大火が発生。当時の城主伊達村景は、家臣の佐々木佐五平を江戸に派遣し、江戸火消しから町火消組の運営を習得させた。佐五平は旧奥州街道沿いの6町組（横町、袋町、川口町、柳町、立町、大町）に民間の火消組「臥煙組」を組織。これを記念して毎年旧暦1月22日に行われた行事が始まりという説もある。

※屋台を舞台に見立て「登場」と表現している